「我等は花を楽む　花は自然の珠玉」
―北海道から台湾へ、未知の植物を求めて―
札幌農学校第十八期生　川上瀧彌

川上瀧彌
Kawakami Takiya

背景：川上瀧彌が宮部金吾に宛てた絵葉書（1912年3月23日付／マニラ）

一八九一年札幌農学校に入学した川上瀧彌（一八七一～一九一五）は、宮部金吾教授に師事して植物分類学の研鑽を積み、北方地域の植物採集に駆け巡った。

▼「札幌農学校に学ぶこと数年、其間偉麗なる北海の天地に放浪して、自然と相親み、花を愛するの念極めて深し…知者は水を楽み、仁者は山を楽む。而して我等は花を楽む　花は自然の珠玉にして、造化の美は此中に萃まる」（川上瀧彌・森廣共著『はな』一九〇二年、緒言二頁）

札幌農学校植物学教室員（1898年）
宮部金吾教授を囲んで、後列左端が川上瀧彌（植物園蔵）

作製した植物標本は札幌農学校の腊葉庫に集積し、「植物名称殊に和名の未だ世に知れざるもの」（『蕙林』第五号、一八九三年、二四頁）の同定・分類に専心した。

▼「［独木舟に乗り、］岸に沿ふて採藻す…岸辺水底の礫間に一奇草を産す、ミヅニラの一種にして胞子稜角あり、*Isoetes echinospora.* と称し、我国未だ此種の生産を知らざりしところなり…又水底毬圓緑色の一奇藻大小羅列するあり、是れ緑色藻の一種 *Cladophora Sauteri.* にして、マリモ（毬藻）の和名を命す、是れ其形状に資るなり、採集多時、既にして夕照水面を射り、雲片往来して山姿連りに浮動し、湖上溯測として湖魚の群り浮ふあり、又一奇観たり」（「阿寒湖採藻記」『学藝会雑誌』第二五号、一八九八年、四六～四七頁。［　］は補記）

在学中、川上瀧彌が和名を付けた植物は、「マリモ」のほか、高山植物「メアカンフスマ」や「ヒメタケシマラン」、食虫植物「ナガバノモウセンゴケ」、水生植物「チシマミクリ」など多岐にわたる。

卒業後、一九〇一年六月から熊本県立農業学校に赴任するも、その眼差しはさらに南を志し、植民地台湾の植物へと向かった。

▼「小生南方を望み候。希望ハ年来ノ素志にハ候へ共、健康の点など懸念仕候ガ、昨今ハ人の運命ハ到底計り知るべからざるもの故、死生の事ハ考るべきものにあらずと存候間、何地にても自分の乗て執るべき職務に居て勉強致度と存じ…新開地などの天産物調査或ハ只今の研究調査「桐樹萎縮病調査」の如きものゝ様なる仕事を致候職務に就き度候」（一九〇三年一月二日付宮部金吾宛て書簡。［　］は補記、句読点は引用者）

一九〇四年一月台湾総督府技師に転じた川上瀧彌は、総督府殖産局で「有用植物調査」事業の主任に就いた。この事業の下で、川上が全力を注いだのは、台湾島内所産の植物の収集、標本の集積であった。

▼「植物調査ハ…北部の採収ハ二庁だけ結了。只今中部に採収中にて標本も立派に出来申候。標品室も小生採収の分ハ整理済み候…来年度の始めにハ新高山（モリソン）探検致度計画中にて、小生も主として之に加り候積りに候…全体の採収を終り候ハバ、有用植物誌編纂致度」（一九〇六年八月一八日付宮部金吾宛て書簡。句読点は引用者）

一九一〇年三月に上梓した『台湾植物目録』には、一三六八種もの植物を記録した。台湾原産の野生ゴム樹の発見と栽培、キナ樹（マラリア治療薬キニーネの原料）の試植も実施したが、川上瀧彌の知的好奇心は、植民地経営に有用な植物だけにとどまっていなかっ

Litterae Populiとはラテン語で「ポプラの手紙」という意味です。
北海道大学（および、その前身である札幌農学校）にゆかりのある
人々の言葉を「リテラポプリ」としてお届けします。

目
次

リテラポプリ …… 2

「我等は花を楽む 花は自然の珠玉」
—北海道から台湾へ、
未知の植物を求めて—
札幌農学校第十八期生　川上瀧彌
大学文書館　山本美穂子

特集：北大は薬学で生命と向き合う …… 4

エボラウイルス侵入メカニズム解明の
先に見えてくるもの
薬学研究院　南保明日香
天然物を活用して効率的に薬を創る
薬学研究院　市川　聡
目に見えない世界で薬を運ぶ
薬学研究院　秋田　英万
薬学部への招待

施設探訪 …… 15

キャリアセンター
キャリアセンター長　恒川　昌美

虫と石⑬ …… 16

オオナンベイツバメガ
総合博物館　大原　昌宏
コランダム（鋼玉）
総合博物館　松枝　大治

もういちど北大と出会う〈その二〉 …… 18

ふたたび学びの舎へ
理事・事務局長　髙杉　重夫

information …… 19

建築設計図が語る北大の歴史〈第23回〉 …… 20

第二農場モデルバーン
（模範家畜房）その2
工学研究院　池上　重康

ジャワ島で視察した幾那樹（『椰子の葉蔭』1915年、301頁）
キナの花は白色、樹皮はマラリア特効薬キニーネの原料。川上瀧彌は、キナ樹の世界最大供給地であるジャワ島で、キナ樹の栽培種類、病虫害被害と防除法、研究施設を視察した。

た。一九一一年六月～一二年四月、東南アジアに出張した川上が最も感銘を受けたのは、壺型捕虫器をもつ食虫植物「ウツボカズラ」であった。

▼「灌木にからみつきたる蔓本あり、長穂の花直立し一見以て珍植物となし、突進深き藪を押し分けて其蔓を引けば水滴急に注ぐこと雨の如し…雨下せる水滴は捕虫嚢内の悪水にて、昆虫の死骸幾百我白衣を彩れり。此植物は常に植物学書に於て相親み温室植物として相知りし年来の知己なり、而も余の識りしは盆栽の矮生のものゝみ、此の如く美大なる蔓生のものは初めてにて、且は野生状態に接せる事なれば驚喜して珍種なり珍種なりと叫び、貪りて其強き茎を切り奇形の葉を摘むこと頗る多く、而も之を捨て去る能はざりき…藪を分けて進むに足下に紫色の奇形簇生せる他のウツボカツラを発見し、又もや我を忘れて之を採れば、地面に這へる蔓の節々より美にして奇なる変形葉を生じたるにて、捕虫嚢の外面棘状突起あり、再び大に採収し…ウツボカツラの種類多く…紅紫の斑紋美なるものあり深緑鮮かなるものあり、嚢の形状丸きもの長きものあり、余は此植物を見る毎に採集又採集、此の如くにして大採集鑵に充満し更に籠に詰め込み夫れも充満し、遂に我両手に携へ行く」（『椰子の葉蔭』一九一五年、八五～八六、九一頁）

川上瀧彌は、一九〇八年七月から台湾総督府が台北に設置した博物館（現在の国立台湾博物館）の初代館長も兼務していた。

▼「一般の人間の智識を拡めて行くと云ふことは、博物館の主眼の目的でございますると同時に、学術上の材料を供給することも亦大切な目的の一になつて居ります」（前掲書五三七頁）

博物館に植物標本館（Herbarium）の機能を完備しようと奔走した川上瀧彌は、新築移転の陳列作業中に病に倒れた。新館開館翌日の一九一五年八月二二日、川上瀧彌は自然界の植物の多様性に魅せられた四四歳の生涯を閉じた。

大学文書館　山本美穂子
Yamamoto Mihoko